

国境から世界を包囲する

北海道大学スラブ研究センター 教授 岩下 明裕

北海道大学スラブ研究センターの岩下でございます。本当は札幌でやる話で、私は友情出演ということでした。札幌の人が京都大学のすばらしい研究所の成果が聴けなくなったというのは非常に残念なことだと思いますけれども私個人にとっては、札幌ではもう私の話は腐るほどみんなが聴いているので、やる方も、聴く方も飽きていますから、京都でやるほうが私個人にとっては非常に楽しいと思っています。暑くて今日は来るのがいやだなと思いましたが、涼しい格好して来れば良いかと思ってこういう格好でまいりました。

皆さん、北海道で、札幌でと言いますと、あとで北方領土の話をしませんが、さぞや北海道の人は北方領土のことを考えているだろうと思うかもしれませんが全くそんなことはありません。むしろ今日来られた皆さんの方が、よっぽど問題関心が強いかもしれない。というのは、私も少し運動関係に関わった事があるのですが、雪祭りの時に署名活動をやるのですね。そうすると札幌の人は、「こんな寒い雪の降る日にせんでもいいのにね」と、誰も署名なんかしませんよ。署名するのは特に関西の人。「うわ〜、こんな雪の時に頑張っているんですね皆さん」という感じがですね。だから運動をやっている人は、札幌の人は冷たいよねという感じです。ですから今日私がここに来て北方領土問題に関わる、わりと事実に近いお話をしたいと思います。

関西で喋るのは久しぶりです。一度、5〜6年前に関西の財界のなんとかというところでやったことがあります。昼飯を食ってワインを飲まされて、その後すぐ喋れという非常に無粋な会で、その会は一切質疑応答なしとのことでした。もう一つは連合というところでやりましたが、どうも北海道の連合の紹介で来たのですが、私の報告内容を聴いて、連合の方針と全然違うのにこんな大丈夫かみたいな感じで、途中でびっくりしていましたが、終わったらなるほどこういうことだったのですかということ言われまして感謝されました。関西で喋るのは久しぶりでございます。

「国境から世界を包囲する」というタイトルにしまして、わりと私はこのタイトルは好きですけどね。内容はちょっと違うのですが、ある催しでこのタイトルにしたら、尖閣問題が最近あるし、このタイトルはちょっとやめてくれませんかと言われまして、私は抵抗したのですが、ホストの意をくみ副題に回して、タイトルは当たり障りのないタイトルにしました。どうもこれは毛沢東的臭いがするのでしょうかね。後でオチもちゃんとつけるつもりもありますけれど。

私の話は、申し訳ありませんが、午前の先生方、先ほどの山本先生と違って非常に粗野な話でございます。ですから私は京都大学の人間ではないということで、あくまでも友情出演であると

ということで、私の言ったことは、呼んだ京大が悪いです。聞き流して楽しんでいただければ、というように思っています。ついでに言いますと、スラブ研究センターというのはなんじゃらほいと思われると思います。だいたいこの名前を知っている人はあまりいません。土木か何かの材料かなと言われますが人文社会系のセンターで、旧ソ連、東欧地域をやっていたセンターですが、ソ連の統合が崩壊して、いったい我々は何をしたら良いのだと…何をやったらいいかよくわからない研究所になっています。

今日お話しするのはグローバル COE というのをやっけていまして、境界研究。これも聴いた事はないと思うのですね。境界研究とグーグルに入れると、全然わけのわからない話が出てきますが、ボーダースタディーズという我々がやっている話を織り交ぜながら今日はやっていきたいと思ひます。

(副題につけた)「平成の国賊」というのは、なんでこういふことを言っているかということはずぐ説明します。元々私は何やっけているかということ、5～6年前はちょっと知られていたのですが、最近はず世の中の移ろいはず速いものずから、私が何をやっけているか北海道の人もほとんど知らない。(それはそれで嬉しいのですが。)

ユーラシアという大きなエリアを睨みながら、中央アジアとか中国、ロシア、その辺りの国境問題を私がやっけておりました。今はあまりやっけていません。中国とロシアのアムール川、ウスリー川あたりの島の取り合ひで戦争したりするのですね。ところがこれは解決してしまつたのです。その辺り何が問題だったのか、どうやっけて解決したのかということのを10年くらいかけてやっけていました。一応、日本語版、英語版、ロシア語版と出しています。中国語版だけは、ずいぶん昔に翻訳は終わっているのになぜか出ない。(出ない理由は知っけているのですが) 私の立場はどちらかということ中国寄りだといっけて、ロシア人からは批判されっけているんですが、それでもロシアは出してくる。一方中国側は自分たちの味方だと思っけている筈だけど、未だに出してくれないというのはなんとなく不思議ですね。

中国の国境はこんな感じずです。昔の満州ずですね、われわれにとっけてみると。あの光っけている部分がいくつか問題ありまして、1969年に珍宝島というところ、またはダマンスキー。年配の方は知っけているかもしれませんが、ゆっけてり喋るといろんなことが喋れるのですが、後の事があるのですとやります。ここで紛争が起こっけて、中国とソ連は当時7000キロを越えて、中央アジアの方へ入っけています。モンゴルから東の方だけで4300キロ。そこが一触即発の非常に緊張度の高い状態にありました。当時、中国は核開発したばかりずから、これは核戦争になるのではないかというくらい緊張していたのです。

この辺の国境というとは北朝鮮と中国とロシア。三国国境のようなところがありまして、こういふところに行ったりしています。問題はノバロフスクの近くの島というのは一番もめていました。結構広ひのです。ここをずっとソ連が持っけていたわけずけど中国はこれをずっと返せと言っけていて、ソ連はいやだと言っけてそれで珍宝島、ダマンスキーで戦争になったということがあります。

中国とロシアは1991年にゴルバチョフと江沢民と協定を結んで、島を分けて解決したのですが、結局何を言いたいかというと、そのあとずっと交渉して最後までもめていた島を半分に分けて解決した。これは法理も何もないのです。もめてどうしようもないから分け合いましょうという形でここに国境線を引いて平和的に解決した。

これが戦争までやった国と国の解決法で、最後はFifty-Fiftyでお互いが勝利したというわけです。この辺りの川はロシアの軍艦があったり、ロシア人というのは自分のところだという境界をつくるんですね。この川の細い流れのところがもめていたのですが、今はここから北に向かって半分に分け合っているという感じになっています。

もう一つもめていたのが、モンゴルに近いところです。アムール川の上流の方です。ここは洪水が起きるとすぐ川の流れが変わるので、もめていたという所ですが、ここもFifty-Fiftyで分け合って解決したということです。こういうことをやっていまして、私は中国とロシア、それから中央アジアと中国の解決をみていて、あるいはベトナムと中国も同じような事を陸でやっているのですが、お互いいろいろな言い分があって、いろんな主張があるのですが、いつまで言っても仕方がないので、お互い折り合って解決したらどうですかということがこの北方領土の本です。

北方領土の本を中公新書で出して、Fifty-Fiftyに解決という事を言ったら、これは2005年の12月に出したのですけれど、ほとんど反響がなかった。なんで反響がないのかは後で説明しますが、下手に批判すると今まで言ってきたことが本当ではないということがわかるので、批判のしようがない。半分はだいたいどこでもそうですが、自分たちに都合の悪い話が出てくると一番良いのは黙殺することです。多分この本が、北海道大学出版会から出ていたら無視されていたと思います。しかし中公新書というのは、1万部以上出ます。だから無視できない。それでも関係者、北方領土に関係している人たちというのは、なるべくこの本に触らないようにしていた。ところが、およそ1年後に朝日新聞が「大佛次郎論壇賞」というのを私にくれたのです。それでここから急に大騒ぎになっていきます。

「大佛次郎論壇賞」というのを朝日新聞から貰ったのが、2006年の12月13日だったと思います。その日に何が起こったか。麻生太郎外相に対して、前原誠司さんが本来は国会で日米関係の事をきく筈だったのを急に変えて、北方領土の話をして「麻生さんは知っていますか、島を分け合うという話を」と。それで麻生さんは「あれだろ、2とか3とか言っている話しだろ」とか言って、麻生が島を分け合う解決を言い出したというように報道されて話が盛り上がって行くということになります。そこで今まで全く私を無視していた某新聞が出している「正論」という雑誌の齋藤勉さんという人がおられるのですが、「北方領土は泣いている」キャンペーンを正論でやります。そこで、これはあとで本になるんですが、「平成の国賊をたたく」というので、その「平成の国賊」というのが私なのです。

ちょっと中を見ますと、「北方領土は泣いている。独り歩きする日露二等分…」面白いですよ。

「今、日本では北方領土の日露で等分するという奇怪な解決案が独り歩きをしている。これをさも一大発見でもしたかのよう得意げに吹聴する学者。」これ、私ですね。「その学者に賞を与える新聞社」これ、朝日新聞社ですね、麻生太郎までそういうことを言っている。とんでもない奴だという話。

さて、ここから本題で、二等分論者に「大佛次郎論壇賞」というのはけしからんというのです。はっきり言うと朝日新聞が憎いんですね、私より。朝日が賞をやったことについて嘔み付いているという感じですね。

上坂（冬子）さん。今はもう亡くなられましたけど、素晴らしい事を書いていて「あの人の本は、半分以上が中露国境の交渉である。しかし、北方領土はちょっとしか触れてないのに、あれで「北方領土問題」と触れているのは大胆である」と。あの人、あんまり北方領土のこと知らないんじゃないのと、上坂さんに言われると、非常にありがたい気がします。

田久保さん。「岩下さんは中露国境の専門家ですが、北方領土と中露国境は全然違う。」当たり前、全部違うのです。違う違うと言っても仕方ないでしょうというのが、私の出発点です。

それで面白いのは、この頃は北方領土をなんとかしろという論調が強くて、朝日だけでなく毎日とか、中公は読売ですからね。プレッシャーを考えていて、もはや産経新聞だけが、四島返還を一括しているような少数派になってしまった。自らを少数派だというのはあまり言わない方がいいのではないかと。とりあえず産経だけはがんばるという意思表示でしたね。

私は、いつときいろいろな事があってその後の話はしてもいいのですが、それはそれで議論はすればいいのですが、一番のポイントは、世界中には山のように境界を巡る紛争があるわけです。国境を巡る紛争が。ですからもう少し、国際水準で考えてみたらいいのではないかと思います。ほんとうに我々は「北方領土は日本のものだ」と言っているけど本当なのか？それをちょっと考えてみる必要があるのではないかと思います。それでやはり独りよがりになってはいけなと思うのです。つまり、国際社会にアピールして、これは日本のものであるから、ちゃんと返せと言わなければいけないので。自分たちの国内の中で「国賊」だとかなんとかと言っても、少なくとも外にアピールしないと議論にならないわけですから世界のことを調べてみようかというのが問題関心です。

もともと私は中国とロシア、中国と中央アジアをやっていたから、もっと他にいろいろあるだろうということで、ボードースタディーズというのを立ち上げました。世界の中で日本を考えようということです。いろいろなボーダーがあります。フィンランドとロシアの国境。私はロシアの東の方はよく行っているのですが、ヨーロッパとロシアの国境というのは最近までそんなに行っていなかったのですが、この辺は非常に文明的ですね。フィンランドの国境警備隊の笑顔。ロシアの国境警備隊では絶対にあんなことしませんからね。フィンランドというと北極圏ですね。ロバニエミというのはサンタクロースが居るところで、ここでサンタクロースに挨拶してから北極に向かうというのが仁義になっています。

国境といえないけれども、実は壁になっているところというのは、実はたくさんありまして、例えばパレスチナとイスラエルですけど本来、協定では禿げ山と緑のところが協定のラインですけど実際にはイスラエル側はこんなに押し込んでパレスチナ人にプレスをかけているのがあのフェンスです。イスラエルに行った事がある人はわかると思いますが、だいたいイスラエル側が高いところをとって見下ろすようなかたちになっていますね。これは国境とは言えませんが事実上のかなり重たい境界になっています。

イスラエル、パレスチナで言うと壁フェンス論争というのがあります。イスラエルのユダヤ人から言うと、テロリストが来るから我々はフェンスを張っているのだと。しかしこの下から見上げるパレスチナの人たちにとってみると、これは壁であるということになります。壁がひとつの空間のいろいろなところにあるというのは、ベルファストとかいろんなところがいくつかあって、そういう研究というのは、かなり都市の中の分断はなされています。昔だとベルリンなんかも入るだろうと思います。それで、もっと言うとエルサレムなんていうのは、ボーダースタディーズのメッカでありまして、上にモスクがあって下がユダヤの本拠ですよね。それで嘆きの壁へ行くとこのように祈っていると。しかしここでも壁があって左側は男だけ、右側は女だけというようにいろいろなところで壁ができていて、強い壁になって国境になるという事です。

ちょっと郊外に行くとゴラン高原になっていて、ほとんどシリアに近いところでフェンスに皆立ち止まっています。ぱっとみると地雷と書いてあるのです。

地雷という思い出したのは、昔、中央アジアと中国の国境を歩いていた時に、旧ソ連との国境でタジキスタンとアフガニスタン、ここに川があるんです。パンジ川という。その向こう側に道がありますが、あれがアフガニスタンという事になります。ここでアフガンの人たちが歩いている。旧ソ連時代は、ソ連軍がアフガン侵攻していますからこっちから押し上げていますが、ソ連が崩壊してタジキスタンとの内戦になるとムジャヒディンがアフガン側から押し寄せてくるというような境界でした。

今はもういませんが、2000年代の前半は、ロシア人がこうやって守っていましたが今はタジク人が守っています。当時、ほんとうにロシア人がいるのかどうかを調査して歩きましてドシャンベでウオッカを20本くらい買いまして、それを全部新聞紙でくるんで車に積んでおいて、ぜひ自宅のボスに会いたいとタジク人の兵隊さんに言うと忙しいといって出てこないのですが、これを渡したいというと喜んで出て来て記念撮影に応じてくれて、ここにロシア人が居た、などという調査をやっていました。こういうようにロシアの方とにこやかに国境警備隊で写真が撮れるというのは非常に珍しいケースです。

話を戻しますと、みんながゴラン高原で立ち止まっていたこの地雷と書いてあるフェンスのところ。これはいったい何なのかといいますと、ここでいったい何が起るのかということ、こうのように警備隊の人がとんできて、ここに入るんじゃないと。ここは足跡で侵入者を見極めるためのレーンです。それで思い出したのが、サンディエゴにあるなど。メキシコとアメリカの国

境ですが、ここは砂の道になっていてメキシコです。ただ、ここの国境は地雷なんてなくて、北米の人から言うとひどい国境だというのですけど、ユーラシアの人間から見るとこれも文明的に見えるのですが、要するにメキシコにジャンプしてアメリカに入るのですね。入れば勝ちじゃないですか。そうすると番号がふってあるのです。パトロールが居て、今1253番から誰か飛び降りたというパトロールが来る。ここの足跡を見てチェックをする。イスラエル人に、これはサンディエゴの国境と同じではないかと言ったらイスラエル人は、「アメリカ人は俺たちから学んだ」と言っていました。

こういうのも境界ですね。今は立派なフェンスになっています。キャンプ・シュワプ。辺野古ですよ。ここは中に行けない。普天間がここに行くのかは知りませんが。ただボートに乗るとキャンプ・シュワプのかなり近くまで行けます。そうするとアメリカ人の海兵隊の人が泳いで来て、How are you ? とかカリフォルニア出身だとか言ってきます。ホームページにこんなの載せていいのかを沖縄タイムスの記者に訊いたらいいですよと言われて（載せています）。こういう境界を越えた交流もできないわけではない。

基地の話をしませんが、実はこのボーダースタディーズのフェンス、ある種の治外法権的エリアですが、これも我々は対象にやっています。ヨーロッパの方でも NATO の基地をどうするかみたいな話になるときにそこに住む住民の問題をどう考えるか等は境界研究ということになります。しかしこの辺で境界というとやっぱり万里の長城ということになります。私は、中国は今、海に万里の長城をつくりたいのかなと思っているのですが。今日はそういう話をするひまはないと思うので（省略します）。

我々がやろうとしているグローバル COE のプロジェクトですが、要するにロシアや中国、日本も含めてこのあたり、ボーダースタディーズ「境界研究」のネットワークがないのです。ところがヨーロッパもアメリカもあるということで、我々はこれを日本の中で作り、それをロシアや中国といっしょに育てていこうというわけです。なぜこれが空白なのかという言葉の問題ですね。ロシア語、中国語というのはなかなか英語と両立せずあまりできる人がいないというのと、もう一つは社会主義体制で国境なんか行ったらとんでもない目に遭うわけです。私の報告を聞いたロシア人が、お前30年前だったら捕まって銃殺だという話ですね。すかさず中国人がこちらでも銃殺だと同じことをいいました。世の中冷戦が終わって平和になったからこういう仕事ができるようになった。逆に言うと空白であるのは当たり前であります。

スラブ研究センターは、わりとこの地域の蓄積がかなりありますので、そういうことをボーダースタディーズと絡めてリードするには良いポジションかなと思っています。

ただ、よその国の事ばかり…国際標準のところですよその国も大事ですが、自分たちのこともやらなければならないというのがあります。ですからこういう世界との結びつきをやって、英文のジャーナルも出していますが、日本語も出している。ということでこれから日本の話に戻りたいと思います。

我々のシンボルは地球儀ですが、もし札幌に来る機会があったら北大の総合博物館2Fの展示コーナーにお越しください。我々の展示コーナーがあってそのシンボルとしてこの地球です。回っています。これは何がいいかというと、この深さ、高さが見えるのです。じっとこれを見るとユーラシアという大陸ですが、ここはユーラシアの海だなといえるわけです。つまりユーラシアの海の一部を日本が占めているというわけで、今ここに紛争が起こっているという事が言えるんだろうと思います。

日本の事もやるべきだと思っていまして、稚内、ロシア、それから北方領土がかかる根室、対馬、福岡、それから与那国島、台湾、それから盲点ですが小笠原。こういう端っこをつなぐネットワークをずっと作っていきまして2007年の与那国以来、小笠原、根室、対馬。それからつい最近与那国でもう一回やりました。

日本の国境の本を出しました時に、皆さん日本の形って海上保安庁かなんかの地図をみるとこんな感じですよ。でも厳密にいうとこれは国境とはいえません。我々境界というのはいろいろな意味を使っているわけですが、国境といったら領海だけです。12海里ということになります。ところが200海里の排他的経済水域というのは、かなりの程度沿岸の国の権利が認められていますから、ある種、国境ではないのですが、それに準ずるもの「境界」というように言えると思います。この地図で言うと、尖閣とか竹島、それから北方領土の辺りが問題あると言える場所になります。

ところがですね、北方領土の問題から入りますが、北方領土と言った時に皆さんはここだけ見るんですね。しかしこれ、ちょっと待ってよ。もともとロシアとの国境はゾーンで変わって来たわけです。これはロシアだけではなくて、日本全体の境界も変わって来たわけです。この地図を見ると後ずさりする人がいるかもしれません。この地図だけ見せると僕が右翼のように思われるのですが、これはアメリカの戦勝記念館で日本が最大広がったときの地図をとってきました。アメリカの地図ってすごいです。タイまで真っ赤になっていますからいくらなんでもタイまでというのはやり過ぎだと、我々は色を変えているわけですが、つまり今の形というのはこの辺ですよ。戦争に負けてははっきりいって縮んでいくという過程のなかで境界ができた。つまり対馬はもともと国境地域ではない。与那国というのははっきりいって親は台湾で、みんなが台湾に憧れて台湾に行っていた。それがここに国境が出来た。小笠原というのも昔はこっちの南の方の中継基地だった。これもここで国境ができた。そして根室も、サハリンとかカムチャッカの中でかなり重要な拠点になりますよね。これも、ここで境界ができた。つまり、もともと日本の国家というものが変わっていく中で境界の問題が生まれ、そしてある部分は解決され、ある部分は解決されずに残っている。これが最初に我々が認識すべき出発点なわけです。よくあるのは、日本の場合、日本はなんだかんだいって単一民族だよね。日本はみんな海に囲まれた島国だよねと当たり前のように考えるかもしれませんが、そういう見方というのは実は、わりと戦後のことであって日本の広がり、良い悪いは別にしてあったわけです。皆さんは覚えていないかもしれませんが、こ

こには国境標石というのがあったわけです。50度線にはね。日本は陸の国境も持っていたわけです。北方領土問題という時に我々が見せられているのは、切り取られた一部であるという事を理解してください。それでなぜ、他の国境が忘れられたのか。私はですね、ある意味で帝国日本に対する非常にまじめな反省をしたんだと思うんです。もう二度とこんなことはしませんと。ずっと内向きに引っ込んで、ポツダム宣言が四つの大きな島と回りの島ですから、4つの大きな島のことだけ考えて、沖縄のことも半分くらい忘れていて、沖縄本島は覚えていてもその周りの島を覚えてなくてというような意識だった。だからあまりにも皮肉もこめていうと、真摯に反省しすぎたと。

もう一つ問題なのは、これは私たちが言わずに、歴史研究をやっている人にとっては常識ですけど、8月15日が終戦という言説。終戦というのは日本が主体的に戦争を終わらせたというイメージですけど本当はそうではない。やっぱり負けたのだらう。それから15日というのは天皇が玉音放送した日であるけれども国際的には意味がない日です。

つまり14日にポツダム宣言を受け入れて、降伏を受け入れることを言ったか、もうひとつは9月2日ですよ。最近ロシアが対日戦勝記念にしたのをけしからんという議論があって、今頃になってしなくてもいいだろうというのは確かですが、9月2日というのは対日戦勝記念日です。連合国はほとんど、アメリカもイギリスも9月2日がVJデーです。韓国は例外で8月15日になっています。ほとんどは9月2日というのが出発点です。9月2日がどういう意味を持つかというと、つまり北方領土というのは日本が戦争で降伏した後にけしからんソ連が奪っていったという見方がありますが、インターナショナルスタンダードで9月2日が戦争の終わった日ならば、必ずしも我々が主張している議論は、外にアピールしないという事を考えないといけな。

それから「固有の領土」。これ、説明できますか。「固有の領土」。「北方領土は固有の領土である。」「尖閣列島は固有の領土である」…「固有の領土」とは何で、「固有の領土」ではないものはなんなのかと考える。「固有」というのは辞書で引くと本来の、生来の、もともとからの。北方領土はもともと日本の領土ですか？北海道だってもともと日本のものですか？と考えていくと、沖縄も違うだろうという事にもなる。

ここから先は私が言っていることではないですが、前近代史研究者の通説があって、歴史的日本というのは本州、四国、九州。本州も北の方は危ない。九州も南の方は危ない。そこが中心です。そこからヤマトが広がっていったというのが歴史的な話です。そうすると南、北、海、陸とこういうふうにひろがっていったところからの日本史というのを切って考えているのですけど、周りから見ると日本が広がって来たというイメージになるのですね。はっきり言うと「固有の領土」は本当にあるのかなということです。

例えば外務省。飯倉公館というのがあります。時々外務大臣などがレセプションをするのですけど、前原さんが外相の時、私も行ったことがあるのですが講演するわけです。後ろに素晴らしい絵がある。有名な画家の。ところがその絵には、北海道も沖縄もないのです。そこで前原さ

んが「北方領土は固有の領土だ」と言っても、北海道もないのに…ロシアの記者がみたら、北海道は「固有の領土」かと皮肉な記事を書きますよ。

もう少し具体的にお話しますと、もともと「北方領土は泣いている」というお話ですが、私に言わせると、島を泣かせているのは誰かという問いを立てないといけないと。1つはソ連に敗戦後に簞奪されたのかというと、敗戦のプロセスというのは8月15日に終わったわけではなくて、樺太でもそうですけど、戦争は続いていたわけですね。いろいろなところで続いていたわけです。降伏が9月2日であるということがひとつ。

それからもう1つは、最近浅田次郎さんが本を出したお陰で有名になりましたが、北千島、カムチャッカのそばにシュムシュ島というのがあります。そこは確かにポツダム宣言を受諾した後にソ連軍が入ってくるわけですが、その時に、強い軍隊が残っていて、ほとんどソ連軍をやっつけてしまいそうになったのですね。これは反実仮想ですけど、そのままほうっておいたら日本軍が勝って、北千島も取られなかったのではないかと思ったりするわけですが、それを途中でやめろと言ったのは中央の方なのです。つまり、もう降伏することを言っているのに、戦争が続いて相手に勝ってしまうとどういうことになるか。それはもう考えるだけでも恐ろしい事になるわけですね。だからもっと大事なものを守るために、シュムシュは勝ちそうになっていたのをやめて降伏する。降伏した日本兵はどこへ連れて行かれるかというと、シベリア送りですね。一番厳しいところへ連れて行く。その後は順番に全部、無血で取られていく。ですから、はっきり言うところちが渡したということになってしまうわけです。

ただソ連が、はっきりいって日ソ中立条約が有効なのを無視して入って来たという、これに関しては100%日本の主張が正しいわけで、ここはソ連が戦争行動をした事に対して日本は100%言う権利がある。しかしそうすると、やはり主戦力は満州ですよ、それから樺太でしょ、そうすると千島だけではないのですよこの話は。私がよくこういう事を言うと「お前はそういうことをいうとロシア人がどれだけ酷い事を我々にしたのかわかっているのか」という声の激励の手紙がたまに来るのですが。だけど日本人もなかなか負けない事をしているよと思うし、一番に言いたいのは、これは北方領土と言われる部分だけではないわけです。それだったらなぜ、北千島を返せ、樺太を返せと言わないのかというのが疑問としてあります。

2番目ですが、1951年にサンフランシスコ講和条約を結んだ時に、日本は南千島を放棄すると言っているわけです。ところがそれを受けていますから、日本とソ連の平和条約を55年に結ぶ時に訓令というのを当時の交渉者に持たせてロンドンでやっているのです。それには3つありました。サンフランシスコ条約は結ばれたけどソ連と講話してないから講話したいという事で、第一の要求は南樺太、北千島、これを全部渡せ。2つ目は、樺太は仕方がない、北千島まで渡せ。三番目が面白いです。4つ返せとは言っていない。歯舞と色丹だけでいい。つまり択捉、国後まで返せという要求は、最初はなかった。

この話がより強烈なのは、これは北海道の一部だから、この色丹と歯舞だけ返してくれれば平

和条約を結んでも良いと訓令にある。だからロンドンでフルシチョフの決断によりソ連が2島を返すと言ったとき、日本側はソ連が2つでさえ返すとは誰も思っていなかったから、びっくりした。そこで、これでほとんどそれで平和条約を結ぼうという話になります。ところが当時の外務大臣の人が、ここはソ連が折れてきたからもう一押ししてみようということで、4つと言った。そうしたらロシア側が怒ってですね、それでお前らみたいな奴らとはもう交渉はしないということになっていくわけです。それで日本の国内の問題もいろいろあって4島ということが出てくるというわけです。

この時やはり、なぜソ連側が2つでも返すと言ったかという、これはアメリカへのプレッシャーなのです。当時沖縄はアメリカが持っていました。それから奄美を実はアメリカが返した直後です。53年に返していますから。そういう駆け引きの中で当時の日本は、まだ日米安保べったりではありませんから、ソ連側は日本を中立化させて少しでもソ連側に近寄せようと、そういうある種のゲームの中でこれは位置づけられている。やっぱり沖縄というのは非常に大事なのですね。もうひとつ言うと、これは現地を目線でいうと、こういうことが言えると思います。米国は結局沖縄を返しました。しかし基地をものすごく残している。北方領土の方は一切返さない。しかし現地の住民、例えば沖縄の人から見ると島は日本のはずだけどフェンスがあって中に入れない。根室の人から見ると島は返ってこない。入れないのは一緒だ。そこに暮らしている人からみるとどちらも壁があって入れない。これは東京から見ると違いますよ。東京から見ると、返したアメリカ、返さないソ連ですけど、そこに暮らしている不自由さから考えるとこれも実は意外とつながっているというふうに言えるわけです。

その後いろいろな交渉をします。しかしほとんど進まなかったということです。フルシチョフは一瞬、そう言ったけれど日本は4島と言って、米軍の基地が恒常化することになって、もう北方領土問題なんてない、島は返さないと言い出してずっとソ連時代があったのですが、ゴルバチョフになっても島を返すとは一切言わなかった。一度言いかけたのはソ連の崩壊した直後の93年頃に二島は返して二島は継続交渉というのがあったのですが、こんな話になりませんと日本側が蹴ったのです。あの時これを受け入れていけば歯舞、色丹は日本のもので択捉、国後はどうするかになっていたと思うのですが、当時は4島返ってくると思ったのですね。しかし、逆に言うとソ連が崩壊してボロボロの時でも彼らは絶対4つ返すとは言わない。そのあと、4つだと言ってくればなんでもいいみたいな議論（川奈提案のこと）も出てきて話がどんどん、動いていくことになります。

それで話を飛ばしますけれども、私のアイデアというのは国境線が決まっていないという事ならやっぱり4つはないでしょうし、日本が4つと言っているほどの根拠はないわけですから、だったらお互いの面子を保つ、安全保障のバランスを考える海の利益を考える、国境に暮らす人たちの目線をもっと大事にしろということを言いました。

私の議論は産経新聞にはああいうふうに言われましたが、ロシア側でもなかなか面白い目に遭

いまして、イズベスチヤという雑誌が新聞に、ずいぶん昔ですけど本を出す前ですから、島を分けようなんて誰も本気で考えてない時に、イズベスチヤに3島、国後までもらって解決するという案を日本政府が密かに考えているなどというデマ記事を載せまして、日本政府の秘密提案。それを起草しているのがスラブ研究センターの岩下だと。国後と択捉のラインを「岩下ライン」と名付けられて、これもまた大変だったのですが、こういう商売はまともなことを言おうとすると、いろいろなところからいろいろな事を言われる。非常に楽しいわけですけども。

海の利益で言うと、今、日本の人たちが漁をしている部分というのはここです。ロシアに金を払って入っているわけです。ここの三角水域というのも漁場が豊かです。つまりこの部分が住民にとって大事だというのがひとつ。それから皆さん意外と忘れていますが、陸の面積だけ考えると7-8%だと。これを入れても30%ちょっと40%ぐらい。ところが、今、境界は200海里がありますから、200海里取ると、2島だけでこんなに海が広がります。3島にすると半分ぐらいになります。そんなことを考えませんかという話ですが、こういう話も私がこの地図を入れて書くまではだれも議論したことがない。これも驚くべきことで、政府の人が見て、はあ、なるほどというぐらいですから、何じゃお前らという感じでした。

安全保障の話は飛ばしまして、極めつけはですね、根室でアンケートをとりました。これは2005年の時ですけど、日本の政府の四島一括の立場を支持しますかということに3割。あとの6割以上は考え直せと。びっくりしますよね。北海道新聞ともこの後一緒にやったら、やっぱり半分ぐらいの人が、政府の今のやり方はやめろと。4島一括なんて返らない。取れるものから取れという議論になっているのです。この時に、いろんな他の年の調査がありまして、小樽、函館は北方領土にさほど関心がないというのが非常によくわかりました。つまり、私の考えでは遠くに居る人、直接利害関係にない人ほど4島でがんばれ。どうでもいいわけですよ、他人事ですからね。4島で頑張れというと、自分が国を思っているような気持ちになって、気持ち良いでしょう。

ところが地元の人には目の前に壁があって行けない。その苦しみをずっと置かれているわけです。皆さん、北方領土が返ってこないことが根室の苦しみではないのですよ、ほんとうは。国境線がない事が根室の苦しみなんです。ほんとうは目の前に壁があるのです。それを壁とは呼べないのです。国境の町根室とは呼べないのです。そんな事言ったら僕、怒られます。あそこは国境がない。国境は択捉の北にあると。私が国境の町根室と言ったら東京の人に怒られました。択捉の北でもいいですが、目の前にいてもう60年も苦しんでいる人たちの事をもう少し考えてあげたらどうでしょうかというようなことです。

「固有の領土」に戻りますと、「固有の領土」って言えないですね。多くの場合外務省は”an integral part”。これは日本の不可分の一部といったニュアンスですね。昔からの日本の領土という意味ではない。”inherited”を使うことがあります、これも言い出すと、いつから”heritage”なのですかということ。外務省の定義は「一度も外国のものになっていない」ということです。

一度も外国のものになっていないのを「固有」と訳すのはちょっと違いますね。「固有」だったら昔から日本のものですよと言わないと本来の意味ではない。つまりそれくらい言葉のあやでやっているということです。だから「固有の領土」と言わない方がいいと思います。きちんと日本の大事な領土ですよ、ただそれだけでいいと思うのです。メディアの人も、外務省はなぜ「固有の領土」だと言わないのか、そうやって交渉しているのかと。交渉にならないですねそれと言うと。なぜかという「固有の領土」というのは国際法的に考えると、昔から使ってきたという意味、あるいは昔、実効支配していたという意味になります。だが、少なくとも北方領土問題にはこの手の主張はあまり効き目がありません。なぜなら条約があるのだから、これらの主張よりも、条約の解釈こそが法的に決め手になるからです。

だから、サンフランシスコ講和条約で択捉、国後は放棄していない、南千島は千島ではないというような、わからないことを一生懸命言って理屈を使っているわけです。結局ですね、日本の形というのが戦争に負けて、そこから今の周辺が国境化された、境界化されたわけですね。そのことをみんな忘れてしているわけです。他人事ですから。

しかし今、紛争がユーラシアの陸から海に変わって行く中で日本の周りの海というのは、今まで海に囲まれているから平和で良かったねという話、中国やロシアは大陸で戦争したいへんだねと。ところが向こうは全部解決していつている。つまり私が思うに今の人間の生産力や技術であってお互い紛争をして境界のことでめるとというのは、コストが高くなっているから折り合って解決しようとしている。逆に海は、昔は広くてみんなのものだったけど最近は海底を掘れてエネルギーも取り出せる。石油も採れる。そして200海里ということも提言できる。つまり海の境界化、海の境界付けが始まっている。そういう中で今までぼうっとしていた日本の周りというのは非常に緊張が高まってきているというのが、現実だろうと思います。

そういう段階で日本の本来の身体を確定するためには、根室、与那国、対馬、小笠原みたいなものの意味をもう少し確認していかなければいけないだろうと。海がこれだけ広い日本の海になっているのは国境離島があるからです。我々はこのフォーラムをずっとやってきていまして、根室では与那国町長とか、対馬市長とか、小笠原の代表者を入れてフォーラムをやりました。内向きになってはいけない。国境の事を日本人だけでやるとナショナリズム的になりますから、そうじゃなくて外国人、インド人とかカナダ人や通訳を入れてやると。元島民の声を聴いたり、そのあと対馬でやって、これは福岡と釜山の超広域経済圏みたいな話をやりました。韓国の方を入れて竹島を巡って少し際どいようなこともありました。対馬新聞みたいなところでもやっています。それで今年の5月は与那国でやりました。ここではですね、根室の特区を作って盛り上げようといったプランを報告したりしました。夜はこうやってエイサーで泡盛飲んで躍ることになります。

この時やったのは空です。与那国に100キロくらいです台湾まで。石垣にも100キロ。ところが石垣には税関、出入国検疫があるのですが、与那国にはそれはない。一番近いのに戻って

いかないといけない。場合によっては那覇に戻らないといけない、石垣だってチャーター便しかない。そこで町長に与那国でセミナーやりましようと言ったら、台湾でもやろうと。チャーター便飛ばそうと言われて腰をぬかしそうになったのですが、頑張って沖縄復帰記念日に与那国にチャーター便を飛ばしました。与那国の上空というのは防空識別圏というのがあって、半分、台湾が管理していたのですが、最近、日本に戻って来て、与那国の空が日本に戻って来て最初のチャーター便ということで大いに盛り上がりました。思わず涙ぐんでいました。皆さん。大学講師になって飛行機を飛ばすとは思っていなかったの。最近、旅行代理店みたいなことをやっています。そして台湾でもやると。最後は宴会をやると。

要するに、このようにネットワークの日本の中の穴、隣国との穴を埋めて世界の中で新しいものをつくる。世界のボーダースタディーズの機関というのは全部、首都にありません。イングランドとスコットランドの国境にダラム大学という映画ハリーポッターの撮影場所ですけど、その大学にありますがロンドンにはない。それからネットワークをやっているヨーロッパも全部、オランダ・ドイツ国境とか、フィンランドもヘルシンキではなくてヨエンスーというロシアの国境に近いところにある。アメリカの学会も西海岸です。ワシントンの人なんて何も興味ありませんね、国境の話には。われわれも北海道ですからいいのではないかということ。

何が言いたいかというと、国境の境界研究をやっているのは端っこにあること。端っこでぐるっと手をつないでキャピタル(首都)を包囲すると、要するにキャピタリズム(首都中心主義)を倒せという話で世界を国境から包囲するというのはこの話なのです。唯一国境研究所の大きいセンターを首都に持っている国は中国です。我々は田舎者同士で独りよがりになるといけないので、ワシントンのシンクタンク、それから中国国務院の発展研究所ですか。そういうところを窓口にして政策発信なり、政策提言をやっています。そして、最後ですが端っこに暮らしている人たちはナショナリズムを信じていません。さっきの根室の例もそうですが、今日は時間がないから話ができませんが、対馬もそうです。みんな隣とつきあいたい。でも、つきあえない。その苦しみをもう少し我々は理解するというふうに思いたいと思います。境界地域に暮らす人々のために私はこれからもこの旗を掲げていきたいと思っています。

